

## 専門職の社会学——国際的な多様性と研究の傾向

Adams, Tracey L. (2015) "Sociology of Professions: International Divergences and Research Directions," *Work, Employment and Society*, 29(1), pp.154-165.

東京大学大学院 岡崎 佑大

### 1

産業構造の変動が生み出したとされる知識労働者は、近年の産業社会を特徴づける重大な職業人であるとみられている。具体的には職務内容や裁量性、キャリアなどに独特な性質がみられると言われているのだが、もともとこうした職業として（とりわけ英米文化圏で）みられていたのは〈専門職 profession〉と総称される一群の職業であった。

専門職という語は独占資格と結びついた、典型的には医師や弁護士などの伝統的・専門的職業を想起させる、ある種概念である。明瞭な定義が存在しているわけではないが、専門職論/専門職よりしろの社会学という議論の場を形成する依代のような役割を果たしている。高度な専門教育や業界団体など職業の特性にかかわる多様な小テーマが隣接し合っている。

しかし、米国の社会学者 Gorman と Sandefur によれば、専門職論は「死を迎えた」<sup>1)</sup>。専門職論は現代的な知識労働のありように追いついていない、というのが彼女らの評定である。ちなみに日本国内でも、専門職論は1970～80年代をピークにあまり引用されなくなり、現在では医療社会学や教育社会学で散見される程度である。

本稿で紹介する Adams 論文は、Gorman と Sandefur への反論を企図したものである。本論文は、専門職の社会学が国際的にどのようなひろがりを持っているのかをサーベイしたうえで、国際的な比較研究のさらなる充実を訴えている。それはとりもおさず、専門職論に現代的な意義が残されているというひとつの主張である。

### 2

Gorman と Sandefur によれば、職業の特権性や権力を論じてきた専門職論は、60年代以降衰退の一端をたどっている。代わって出てきた職業研究が示して

いるように、専門職の立場は、専門的知識の合理化が進展するにともなって脅かされているのである。専門職の社会学はもはや有用な道具立てではなく、組織内の人員等の配置や労働市場の特性、専門的労働者の経験などがより着目されるようになっている。

対する Adams の指摘は、こうした理解が米国における研究の文脈のみに基づいているというところにある。データベース *Sociological Abstracts* と *SocIndex* で検索可能な論文を集計すれば明らかであるが、専門職の社会学に関する論文は50年代以来一貫して増加傾向にある。全体の論文数そのものの拡大を考えても、とりわけ2000年代における専門職に関する出版物の増加は顕著である。

Adams はさらに、*Sociological Abstracts* に収録されていなおかつ専門職について論じている88年以降の英語論文（書籍になったものも含む）500件について、追加的な検討を行う。

ここ25年のテーマは、(1) 職業と不平等の観点、(2) 社会的な秩序や規制を実現する職業の2つに大別される。より細かくみていくと、次のようなものがある。ジェンダーやエスニシティ、あるいは社会経済的地位の不平等が、専門職のポストへの到達や報酬にもたらす影響。ある職業が専門職として成立していく歴史的プロセス。専門職としての地位が脅かされている時代的状况。それぞれの専門職の活動内容や職業満足度、転職。理論的研究。組織のなかで働く専門職とその分野、制度分析。専門職間の関係性や職務領域の線引き、対立、チームとしての編成状況。専門職としての志、信頼や倫理。それぞれの職業における専門的知識の内容。なお、これらの各テーマが全体に占めている割合は、最大27%から最小6%と幅がある。

またこれらの論文は、筆頭著者の所属地域によっても分類される。研究テーマの傾向は、地域によっても大きく異なっているのである。顕著な例を挙げると、専門職のキャリア・職業満足度・転職に対する関心が

米国で高いのに対し、欧州や他の英語圏（カナダなど）では低い。反対に、法律による規制や政策に対する関心は米国で薄く、それ以外の国では色濃い。

より基礎的な理論に着目すると、これらの論文は古典的・現代的な社会理論双方の問題関心を引き継いでいることが分かる。根源的にはヴェーバーやパーソンズ、フーコー、ブルデューの理論に依っている。

地域によって引用の傾向が変わってくるのは理論についても同様であり、英国では、米国に比べて組織・制度理論が援用されにくい。また、スペンサーやフーコーを援用することによって、専門職が国家の統治を目的とした特権的存在であることを示す傾向にある。米国の研究者は専門職の盛衰について、ヴェーバーやブルデューなども含めたより幅広く社会理論を用いている。

こうしたちがいは、専門職を雇用する組織の性質に基づいているように見える。欧州における研究の多くは公共セクターの被雇用者を専門職としてとり上げているが、対して米国では国家からの規制を受けつつも民間セクターに位置している職業が専門職として取り扱われる。

したがって今後は、両者を勘案した国際的な比較研究が求められるであろう。それは単に新たな知見を与えるだけではなく、社会歴史的・文化的文脈を把握するうえで有用なものとなる。たとえば米国（での研究）ではなぜ専門職に対する規制がさして重視されないのか、なぜ国家と専門職との関係が比較的弱いのか、そうしたことが相対化されなければならない。専門職理論の進歩もこれによって達成されるだろうと述べ

て、Adams は論文を締めくくっている。

### 3

膨大な作業の結果を目の当たりにして気付かされるのは、社会歴史的・文化的文脈のちがいを超えてなお特定の職業が、専門職という用語によって同じ議論の俎上に載ってきたという研究史上の不思議である。現代的な動向をいったん無視しても、官吏的側面を持つヨーロッパ大陸的な専門職と、自主規制に基づく米国的な専門職は同じものにはみえない。共通性を意識するほうが困難だとすら思えるが、だからこそ Adams は社会歴史的・文化的文脈を踏まえた、より高度な理解を志向しているのだといえよう。

この点は、日本国内の専門的職業を研究するときにもあてはまりうる。つまり、専門職論的な枠組みが日本的な文脈になじまないとしても、専門的職業についての社会歴史的研究は直ちにその意味を失うようなものではない。Adams の論旨に沿うならば、そのずれを問うことが、専門的職業について論じる際の日本特有の偏りを見直し、理解することにつながっていくからである。

- 1) Gorman, Elizabeth H. and Rebecca L. Sandefur (2011) "‘Golden Age,’ Quiescence, and Revival: How the Sociology of Professions Became the Study of Knowledge-Based Work," *Work and Occupations*, 38(3), pp.275-302.

おかざき・ゆうだい 東京大学大学院人文社会系研究科  
博士課程。産業社会学専攻。